曽田三郎先生定年退職を記念して

土居　智典

私が広島大学の大学院に進学して、曽田先生の門下生となったのは 1995 年のことである。その後、途中 4 年間の北京留学の期間はあったものの、2006 年に博士課程後期を終了するまでの 11 年間、大学院生として曽田先生のゼミに在籍した。比較的就職がすんなり決まった先輩方と違い、長い院生生活を送った私は、とくに長い期間お世話になったことになる。

長い期間在籍したからといって、容易く近づけるような師弟関係であったわけではない。私より一回り以上も年齢の上の諸先輩方は、曽田先生の門下というよりかは、横山先生の学生同士という感覚で、よく飲みに行ったりもされていたようだが、私にとって、そういった「近い」感覚はなかった。

先生は、院生から助手時代にかけて、とくに「よらば斬る」といった雰囲気を醸し出されていたそうであるが、私が広島大学に来た頃、諸先輩方からは、だいぶ丸くなられたと噂されていた。ただ、演習の授業のときなどは、私からすると、どこが丸くなったのだろうというくらい厳しい雰囲気を発せられていた。そして実際に、先生からの質問などは、かなり厳しかった。

90 年代の末頃、私が博士課程の後期課程に進学したあたりの時期から、確かに先生は丸くなられたと感じた。演習の授業のときに、笑顔を見せられるというようなことは、それまで記憶になかったことだが、わりと和やかに話をされる場面が多くなったように思う。一般に年齢を重ねて丸くなるという話はよく聞くが、先生の場合は、私よりも若手の院生の雰囲気に合わせて柔らかくなられたのかもしれない。私が留学から帰ってきた頃、演習などで私の後輩が報告しているときに、ズバズバと切り込んでくるような質問をされることはなくなったように見えた。だからといって私などが油断して、演習などで気を抜いて報告していると、準備不足の点などを厳しく追求された。そこで打たれ弱い私などは、落ち込んだりしたものだが、きっと鍛え甲斐があるからこそ厳しく言ってもらえているに違いない、と思って却って励みにするようにしていた。

とにかく上述のような調子であったので、長く先生の傍にいながら、諸先輩ほど取っ組み合って議論できたわけでも、後輩たちのように和やかに交われたわけでもなく、厳しい雰囲気のもとの距離感があったので、きちんと先生の学問を継承できたかという点については、あまり自信がない。もっともこれは、私自身の議論の能力の低さなどに、大きな原因があるのかもしれないが。

さて、先生の「思い出」として、細かなエピソードを列挙することは、紙幅の都合上かなわないが、２つだけこの場を借りて書きとめておきたい。

１つは、雑誌に提出する原稿などの指導が、本当に懇切丁寧であったことである。これはゼミ生に対する指導なら、どなたでも同じような事はいえるだろうが、先生の場合は、この丁寧さの対象がゼミ生に限らなかったということである。98 年に、私は研究室で発行している『東洋史学報』の編集を担当したが、その際に、投稿する院生の原稿に、史料の利用などで不備があると、先生が

かなり長い時間をかけて指導されていたのを記憶している。それも、文学研究科の学生でなくても、他の研究科の学生であっても、分け隔てなく時間をかけて指導されていたのであった。文学研究科の院生を鍛えるというだけでなく、なんとかして中国近代史の若手全般の水準を上げようという気迫のようなものを、いやというほど感じされられた。

もう1つは、個人的なことではあるが、私の就職活動などの際に推薦状を依頼したときのことである。先生には何度か推薦状を書いてもらったが、私はいつも、推薦状などは形式的なものだろうから、と思って、かなりいい加減な気持ちでお願いしていたところがある。しかもだいたい期限が迫ってからという失礼なことが多々あり、多大なご迷惑をおかけしたことを、この場でもお詫びしたいが、そんないい加減な弟子の依頼に、先生はものすごく時間をかけて推敲して推薦状を書き、さらに私を呼び出して、細かい経歴の記述などに間違いや問題がないかを詳細に確認され、もう一度見直してから書き上げられるのであった。そうやって呼び出されるたびに、私は恥ずかしい思いでいっぱいになった。あとで知った話だが、他所ではそういった推薦状は、依頼する側が文案を書いてから依頼しにいくケースもあるとのこと。先生は、そういった大事な文書を、決して人任せにしない方だった。いや、諸事全般にわたって、大事なことは最後まで自分で徹底して目を通さなければ納得されない姿勢は、随所に感じられた。

詳細な学問的な指導の内容まで書きあげるときりがないが、上のような普段の真摯な言動から、私は研究者としての厳しい基本姿勢を学ばせてもらったような気がする。

初めてお会いしてから10年以上の月日がたつが、その間、歳をとられたと思うようなことが全くなく、精力的に著作活動も続けてこられた先生が、もう定年の年齢を迎えられるというのが、未だに信じられない。定年後も、変わらぬ壮気に満ちた活動を継続され、研究会でもお会いできることを祈念し、また引き続きの指導を賜れることを切望しつつ筆を置く。

（どい　とものり　博士課程後期2005年度修了生）